別紙 4

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論 文 題 目　　日本語教育文法における「部分否定表現」の研究

氏　　名　　龔　柏榮

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本語教育文法の立場に立ち、「ワケデハナイ」「トハカギラナイ」「ノデハナイ」といった 3 つの部分否定表現を取り上げ、学習者が 3 つの表現を理解・産出する際に使用できる情報を記述することを目的として、分析を行ったものである。

これらの部分否定表現はいずれも聞き手の考えを否定するという点で共通している。3 つの文法形式の異同を日本語教育の観点から考えると、従来の先行研究や文法解説書の意味記述は抽象的であるため、学習者は意味用法を理解しにくくその習得は難しいと言える。学習者は、具体的な言語情報(共起表現、文中の位置、媒体など)を把握できていないため、これらの部分否定表現を使用する際に、しばしば誤用や非用が見られる。誤用や非用の原因は従来の先行研究や文法解説書の意味記述に関する説明不足も影響していると考えられる。そのため、本研究では 3 つの文法形式を分析するにあたって、共起しやすい表現、否定されやすい要素、文中の位置、媒体などに着目して分析する。なぜなら、「ワケデハナイ」「トハカギラナイ」「ノデハナイ」とともに使用される頻度が高い表現を明らかにすることで、情報を可視化でき、学習者はそれらの共起表現とともに各形式を学習することで、実際の運用につながりやすく、誤用や非用を防ぐことができるのではないかと考えるからである。

本論文は 7 章からなる。各章の概要は次の通りである。

第 1 章　序論

第 1 章では序論として、本研究の研究背景、目的と考察対象、研究方法、援用する概念、本論文の構成について述べる。

第 2 章　先行研究からみる本研究の立場と研究姿勢

第 2 章では、日本語教育文法と部分否定表現の研究現状を概観した上で、日本語教育文法の観点から部分否定表現を研究する必要性について述べる。さらに、日本語教育文法が誕生した経緯、日本語記述文法との関係、日本語教育文法が目指すものを紹介した上で、日本語教育文法に関する本研究の立場と研究姿勢を示す。

第 3 章　「ワケデハナイ」

第 3 章では、「ワケデハナイ」の分析を行う。まずコーパス調査で「ワケデハナイ」がどのような表現と共起しやすいかを明らかにする。次に、共起しやすい表現をもとに「ワケデハナイ」を分類し、各用法について【実在事態と推論事態の関係】と【機能】との関係を分析していく。以下の分類は、【共起しやすい表現】、【実在事態と推論事態の関係】、【機能】に基づいた、「ワケデハナイ」の 5 つの用法である。

①逆接の条件

【共起しやすい表現】だからといって、とは言っても、であっても（+必ずしも）

【実在事態と推論事態の関係】現実世界で推論事態が存在しない

【機能】話し手が推論事態に対してそうとは言い切れないことを示唆する

②不成立の可能性

【共起しやすい表現】必ずしも

【実在事態と推論事態の関係】推論事態に反する何らかの実在事態が存在する

【機能】話し手が推論事態についてそれが絶対だと言えないことを示唆する

③極端（全体・必然・高頻度）

【共起しやすい表現】すべて、完全に、必ず、いつも、常に

【実在事態と推論事態の関係】現実世界で推論事態が存在しない

【機能】話し手が現実では対立的関係にある 2 つの実在事態が存在することを示唆する

④打ち消しの強調

【共起しやすい表現】まったく、全然

【実在事態と推論事態の関係】現実世界で推論事態が存在しない

【機能】話し手が現実世界の状況を根拠として、推論事態は存在しないことを示唆する

⑤取り立ての副詞

【共起しやすい表現】特に、別に

【実在事態と推論事態の関係】推論事態に反する何らかの実在事態が存在する

【機能】話し手が推論事態は実在事態から区別されるような状態にないことや、特に取り立てていうことはないことを示唆する

第 4 章　「トハカギラナイ」

第 4 章では、「トハカギラナイ」の分析を行う。まずコーパス調査で「トハカギラナイ」がどのような表現と共起しやすいかを明らかにする。次に、共起しやすい表現をもとに「トハカギラナイ」を分類し、各用法について【一般論と可能性の関係】と【機能】との関係を分析していく。以下の分類は、【共起しやすい表現】、【一般論と可能性の関係】、【機能】に基づいた、「トハカギラナイ」の 4 つの用法である。

①不成立の可能性

【共起しやすい表現】必ずしも

【一般論と可能性の関係】一般論と反する事態が存在する可能性がある

【機能】話し手がと反する事態が存在する可能性もあることを示唆する

②逆接の条件

【共起しやすい表現】だからといって、とは言っても、であっても(+必ずしも)

【一般論と可能性の関係】一般論と反する事態が存在する可能性がある

【機能】一般論と反する事態が存在する可能性があることを否めないため、話し手が一般論に対してそうとは言い切れないことを示唆する

③取り立て(限定・条件)

【共起しやすい表現】さえ、だけ、ばかり、ば、～場合

【一般論と可能性の関係】一般論と反する事態が存在する可能性がある

【機能】話し手が一般論に対してそれと異なる自分の主張を持ち出す

④極端(全体・必然・高頻度)

【共起しやすい表現】すべて、完全に、必ず、常に、永遠に、いつでも

【一般論と可能性の関係】一般論の一部が正しくない

【機能】話し手が一般論の一部の不適切さを示唆する

第5章　「ノデハナイ」

第5章では、「ノデハナイ」の分析を行う。まずコーパス調査で「ノデハナイ」がどのような要素を否定するのかを明らかにする。次に、否定される要素によって「ノデハナイ」を分類し、各用法について分析していく。「トハカギラナイ」によって否定されやすい要素を次のように4つに分けている。

①必須格

「が」、「を」、「に」

②必須格以外の格成分

「で」、「から」、「へ」

③複合格助詞を含む成分

「を通じて」、「に応じて」、「ために」、「のせいで」

④副詞

「ただ」、「単に」、「全部」、「まったく」

第6章　「ワケデハナイ」と「トハカギラナイ」の使用環境をめぐって

第6章では第3章と第4章で考察した「ワケデハナイ」と「トハカギラナイ」を類義表現として取り上げ、コーパスから抽出したデータに基づいて「ワケデハナイ」と「トハカギラナイ」の前接語句の種類に着目して使用環境を調査し、その傾向を明らかにする。最後に、明らかになった「ワケデハナイ」と「トハカギラナイ」の使用環境を踏まえ、日本語学習者にとって分かりやすい指導法を提案する。考察の結果は次の通りである。

①『分類語彙表-増補改訂版』の類分布から見ると、「ワケデハナイ」については「Ⅰ体の類」を表す名詞や「Ⅳその他の類」を表す接続詞や感動詞などに後接することはあまりなく、「Ⅱ用の類」を表す動詞と「Ⅲ相の類」を表す形容詞に後接して使われる傾向が見られた。一方で、「トハカギラナイ」では「Ⅲ相の類」を表す形容詞に後接することはあまりなく、「Ⅰ体の類」を表す名詞、「Ⅱ用の類」を表す動詞と「Ⅳその他の類」を表す接続詞や感動詞などに後接して使われる傾向が見られた。

②『分類語彙表-増補改訂版』の中項目分布から見ると、「ワケデハナイ」については「Ⅱ用の類」を表す動詞である「2.12 存在」、「2.15 作用」、「2.30 心」、そして、「Ⅲ相の類」を表す形容詞である「3.31 言語」に分類される用例が多かった。一方で、「トハカギラナイ」については「Ⅱ用の類」を表す動詞である「2.12 存在」、「2.15 作用」、「2.34 行為」に分類される用例が多かった。よって、中項目分布を観察した結果、「ワケデハナイ」と「トハカギラナイ」の前接語句として両表現とも動詞と結びつきやすいことがわかった。

③動詞の意味特徴について、工藤(1995)と志波(2015)を参考にすると、「ワケデハナイ」は状態変化や位置変化などの変化を表す動詞、認識を表す動詞と結びつきやすいことがわかった。また、「トハカギラナイ」は催行を表す動詞と結びつきやすいが、「ワケデハナイ」との間にそれほど差はなかった。また、「ワケデハナイ」と「トハカギラナイ」はいずれも存在を表す動詞と結びつきやすいことがわかった。

④「ワケデハナイ」は「名詞/動詞/形容詞+という+ワケデハナイ」という形式が使われる傾向が見られて、「トハカギラナイ」は「そう+トハカギラナイ」という形式が使われる傾向が見られた。

第 7 章　「ワケデハナイ」と「ノデハナイ」の使用環境をめぐって

第 7 章では第 3 章と第 5 章で考察した「ワケデハナイ」と「ノデハナイ」を類義表現として取り上げ、コーパスから抽出したデータに基づいて「ワケデハナイ」と「ノデハナイ」のジャンルと出現位置に着目して使用環境を調査し、その傾向を明らかにする。最後に、明らかになった「ワケデハナイ」と「ノデハナイ」の使用環境を踏まえ、日本語学習者にとって分かりやすい指導法を提案する。考察の結果は次の通りである。

①書き言葉においては「ワケデハナイ」が使われる傾向がある一方、話し言葉においては「ノデハナイ」が多用される。

②出現位置を主節と従属節に分けて考察したところ、書き言葉における「ワケデハナイ」は主節に現れやすく、「ノデハナイ」は従属節に現れやすいことが確認された。その一方、話し言葉における「ワケデハナイ」は従属節に出現する傾向があり、「ノデハナイ」は主節に出現する傾向がある。

③「ワケデハナイ」と「ノデハナイ」を工藤(1997)が指摘する「結論の否定」「程度否定」および「説明の否定」「言葉づかいの否定」を用いて検討した結果、いずれの媒体においても、相互に言い換えることができる「結論の否定」と「説明の否定」の出現率が高く、言い換えが不可能とされる「程度否定」と「言葉づかいの否定」の出現率は低かった。また、意味の面からも検討したものの、媒体の差による特徴は得られなかった。

第 8 章　結論

第 8 章では結論として、本研究で明らかにした内容をまとめ、今後の課題について述べる。